

自己選択を許容した授業における学生の選択行動の検証

Investigation of Students' Choice Behaviors in Classes Allowing Self-choice

上村 英男*1

Hideo KAMIMURA*1

*1 福岡工業大学短期大学部

*1 Fukuoka Institute of Technology, Junior College

Email: h-kamimura@fit.ac.jp

あらまし：学修への主体的な関与を促すため、学びのユニバーサルデザインの理論に基づき、学修の様々な場面に選択肢を設けた授業デザインを考案した。この授業デザインの実践を進めるにあたり、本環境下における学生の選択行動およびその理由を把握しておくことは貴重な資料となる。そこで本稿では、本授業デザインにおいて、特に対面授業への参加について、学生がとった選択行動およびその理由について検証し報告する。

キーワード：反転授業、eラーニング、選択、自己決定、学びのユニバーサルデザイン

1. はじめに

高等教育機関への進学率が上昇するなか、様々な特性を持った学修者が高等教育機関に在籍している。一方で、社会からは、主体的な思考力や判断力を備えた人材の育成が求められている。これらの課題に対し教育現場では、アクティブラーニングなどをはじめとした教育の質的転換に向けた取り組みがなされ、多くの成果が報告されている。

筆者は、学修者の多様性に対応するため、学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning；以下UDL）の理論に基づき、授業前・授業内学習への取り組みに選択肢を設けた授業デザインを実践してきた。このたび、学修への主体的な関与を促すため、従来実施してきた授業デザインをさらに発展させ、対面での授業への参加についても選択肢に含む授業デザインを考案した。

この授業デザインの実践を進めるにあたり、本環境下における学生の選択行動およびその理由を把握しておくことは、貴重な資料となる。そこで本稿では、本授業デザインでの3回の実践において、特に対面授業への参加について、学生がとった選択行動およびその理由を検証し報告する。

2. 学びのユニバーサルデザインについて

学びのユニバーサルデザインとは、Rose & Meyerが提唱した教育の枠組み⁽¹⁾である。UDLは学びのエキスパート（自律した学修者）を育成することを目的とし、授業デザインの中であらかじめ選択肢を設けることを推奨している。アメリカの団体CASTによりガイドライン⁽²⁾が提供されており、そこでは3つの原則と、それぞれにいくつかのチェックポイントが示されている。今回、原則の1つ「取り組みのための多様な方法の提供」におけるチェックポイント「個々人の選択や自主性を最適にする」に着目した。ここでは、「目的に到達するためのツールや援助などに関して選択肢を設け選択の機会を与えるこ

とは、自己決定力を育むとともに、学習に自ら関与したと感ずることができる」と述べられている。

3. 授業デザインについて

本授業デザインを適応したのは1年生対象の数学関連科目である。LMSを用いて、学習用視聴コンテンツ、練習問題および解説動画、課題を配信し、対面授業に参加しなくても学習ができるようにした。

学生は、まず学習用視聴コンテンツを用いて学習し、授業日前日までにWeb上で小テストに取り組む。小テストは直ちに点数が表示され、自分の理解度を確認することができる。小テストの点数などを参考にし、対面授業への参加・不参加を各自が判断する。授業内容を十分に理解できたと判断した学生は、対面での授業に参加しなくてもよいが、課題に取り組み、授業終了時刻までに提出しなければならない。対面での授業は、前半は学習用視聴コンテンツと同じ内容の授業を行い、後半は質問を受けるなどの時間とした。対面授業に参加することを選択した学生は、授業を聞いてもよく、授業を聞かず用意された練習問題などに取り組むこともよいこととし、各自の理解度に応じた学習活動を行うことを許容した。なお、対面での授業に参加した学生も、授業終了時刻までに課題を提出しなければならない。

4. 調査について

対象授業の履修登録者数は170人であり、4クラスに分かれて授業は行われた。第3回目の授業から本授業デザインを実践し、授業回ごとにアンケート調査を実施した。本稿では、第3回から第5回にかけての結果を報告する。なお、第4回授業の数日前に学校の所在地域への緊急事態宣言の発令が確定した。

5. 結果および考察

授業ごとに実施したアンケート調査の結果を示す。

まず、対面授業への参加状況をまとめたものが図1である。第3回授業では約60.6%の学生が対面授業に参加したが、回を追うごとに参加者は減る傾向にあった。次に、対面授業への参加・不参加の理由について記述された回答を概観したところ、表1のように分類することができた。各項目の割合をグラフにまとめたものが図2および図3である。

参加した理由では、「学習環境・学習方略」や、「学習内容のさらなる定着」に起因する理由が多いことが特徴として挙げられる。記述からはそれぞれ、「集中できる」「家だとダラダラしてしまう」「パソコンで見ても頭に入ってこない」「オンラインが好きではない」などの意見や、「動画を視聴して理解はできたが、できる！という自信が欲しくて参加した」「理解はできていたが、さらに理解を深めるため」などの意見が見られた。

参加しなかった理由では、「事前学習動画を見て、内容を理解したから」などのような「事前学習での理解度」に起因する理由が最も多かった。また、第4回、第5回授業で「コロナ感染予防」に起因する理由が挙げてきたことも注目する点である。なお、このことは、感染リスクが高まった場合でも柔軟に対応できた可能性を示唆するものと考えられる。

また、小テストにおいて100点を取って授業に参加した学生と50点以下で授業に参加しなかった学生の理由を見てみると（人数は表2参照）、100点を取って授業に参加した学生からは、自身の好む学習スタイルへの言及や「小テストはできたが練習問題で解けない問題があった」「復習のため」などのような学習に対する前向きな姿勢を感じる記述が散見された。一方で、50点以下で授業に参加しなかった学生は、コロナ感染予防の理由以外ではほとんどが「理解できた」と記述していた。特に0点にもかかわらずそのような理由を記述した学生については様々な要因が考えられ、今後さらなる検証が必要である。

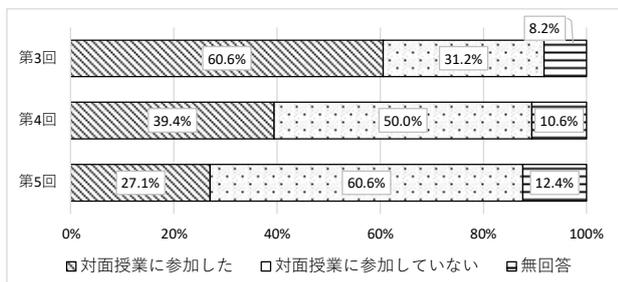


図1 対面授業への参加状況

表1 対面授業への参加・不参加の理由の分類

対面授業に参加した理由	対面授業に参加しなかった理由
事前学習での理解度	事前学習での理解度
他の授業との関連	他の授業との関連
学習環境・学習方略	学習環境・学習方略
学習内容のさらなる定着	コロナ感染予防
その他	その他

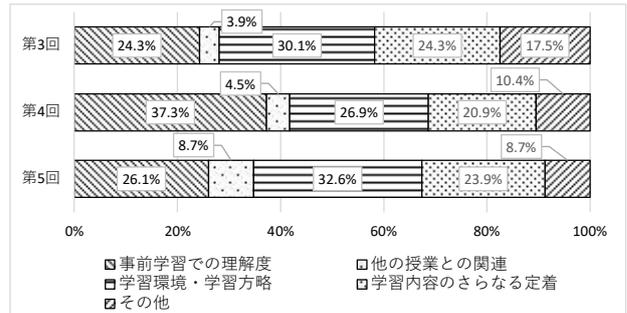


図2 対面授業に参加した理由

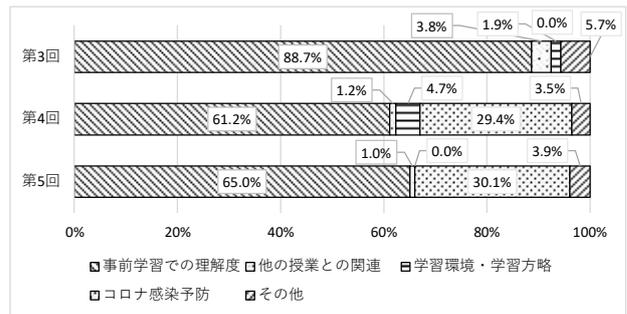


図3 対面授業に参加しなかった理由

表2 小テストにおける成績上位層および下位層の対面授業への参加についての理由の内訳

	100点で対面授業に参加した学生数			50点以下で対面授業に参加しなかった学生数		
	第3回	第4回	第5回	第3回	第4回	第5回
事前学習での理解度	6	6	6	9	8	5
他の授業との関連	1	0	2	0	0	0
学習環境・学習方略	14	8	4	0	1	0
学習内容のさらなる定着	10	8	2	0	4	6
その他	6	3	1	0	2	2

6. おわりに

今回、3回の実践における学生の選択行動について検証した。その結果、学生は様々な理由で選択行動をしていたことがうかがえた。また、感染リスクが高まった場合でも、本授業デザインでは柔軟に対応できる可能性があることが示唆された。このことは、本授業デザインを実践していくうえで貴重な資料となった。また、学修に対する前向きな姿勢を感じられた一方で、理解度の認識に疑問を感じられる側面も確認された。このことについては、実践を継続していくなかで、さらなる検証を進めていきたい。

参考文献

- (1) Rose, D.H., & Meyer, A. : “Teaching every student in the digital age : Universal Design for Learning”, Assn for Supervision & Curriculum, Alexandria, Virginia (2002)
- (2) CAST : “Universal Design for Learning Guidelines version 2.0” (金子晴恵, バーンズ亀山静子訳 : “学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン全文 Version 2.0” , <https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-0/udlg-fulltext-v2-0-japanese.pdf> (参照 2021.5.21))